

第 69 回 海の道と東西世界②

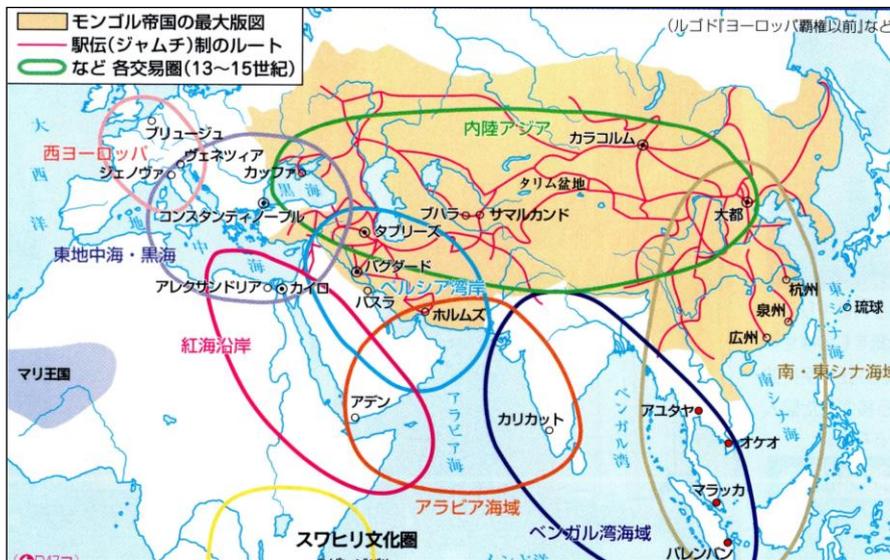
1 「海の道」 13世紀～14世紀

- 13世紀には、モンゴル帝国がユーラシア大陸の広大な領域を支配した。
- 元は大運河の補修や海運の整備を行い、陸上ルートである「草原の道」や「オアシスの道」と海上ルートである「海の道」を都の（ ）で結び付けた。



- アジア各地に行った遠征は、海上貿易の支配が主要な目的であった。
 - 杭州、明州（寧波）、（ ）、広州は、世界有数の港として栄えた。
 - 陸上では（ ）と呼ばれる駅伝制を整備した。
- 東西交流が活発となり、（ ）や（ ）などが元に来訪した。

クビライ=ハン
フビライとも。モンゴル帝国の第5代大ハーンで、元の建国者。



マルコポーロ
ヴェネツィア出身と言われるが、非常に謎が多い。



イブン=バットゥータ
14世紀の大旅行家である。

- ヨーロッパでは、十字軍以降に（ ）や（ ）などのイタリア商人が地中海東部で（ ）を行うようになった。
- 13世紀には、エジプトのカイロやアレクサンドリアを訪れ、ムスリム商人から（ ）を買い付けてヨーロッパに運び込むようになった。
- イタリアは経済的に繁栄し、内陸部のミラノや（ ）も栄えた。

<香辛料がヨーロッパに来るまで>



ヴェネツィア

このヴェネツィア、ジェノヴァ、ピサの3都市は、海上貿易によって栄えた海洋都市国家である。ヴェネツィアはその代表であり、第4回十字軍の黒幕でもあった。町には道路がなく、人々は運河を船やゴンドラで移動する。



ジェノヴァ



ピサ



フィレンツェ

フィレンツェのメディチ家は、金融業や毛織物業で大もうけした。その富をもとに多くの芸術家を援助したことは、ルネサンスの一要因となった。



ミラノ

2 「海の道」 14世紀～15世紀

- ・14世紀になるとモンゴル帝国が崩壊し、中国では（ ）が成立した。
→明は（ ）を行い、前期倭寇の取り締まりと朝貢貿易の独占を目指した。
※室町幕府の（ ）と行った（ ）はその代表例。

- ・東南アジアでは、ムスリム商人やスーフィーによりイスラーム教への改宗が進んだ。
- ・14世紀、東南アジア初の本格的なイスラーム教国である（ ）は、マレー半島の港マラッカを都とし、東アジアとインド洋を結ぶ交易で繁栄した。
→15世紀初頭、明の（ ）の遠征に協力し朝貢国となった。
- ・15世紀、沖縄の（ ）は、中山王のもとで統一された。
→中国、日本、東南アジア諸国の中継貿易で栄えた。
- ・南インドでは、チョーラ朝滅亡後の14世紀に（ ）が建国され、北インドのムガル帝国と対峙した。
→インド産の綿織物や香辛料を扱い、また西アジア産の馬を大量に輸入した。



現在のマラッカ海峡

マレー半島とスマトラ島に挟まれたマラッカ海峡は、東アジアとインドを結ぶ最短ルートであり、現在も多くのタンカーが行き来する場所である。



沖縄の紅型(びんがた)

沖縄の伝統的な染色技法である紅型は、中国の装飾、日本の友禅、ジャワ島のバティックなどの影響がある。沖縄文化は多様な文化が混合して成り立っている。



ハンビのヒन्दウー教寺院

ヴィジャヤナガルとは、「勝利の都」という意味である。現在は遺跡となっており、ハンビという名前で呼ばれている。世界遺産。

3 「海の道」 16世紀～17世紀

- ・16世紀になると、ヨーロッパは（ ）を迎えた。
→（ ）は、16世紀初頭にマラッカ王国を滅ぼしてマラッカ海峡を抑え、火砲などの武力によって「海の道」の交易に参入した。

- ・ムスリム商人は、マラッカ海峡を避けてスンダ海峡を通るルートを使用した。
→スマトラ島北端の（ ）や、ジャワ島西部のバンテン王国が栄えた。
- ・16世紀、後期倭寇の活動が活発になったため、明は海禁をゆるめた。
→交易が盛んとなり、日本の（ ）と中国の生糸は莫大な利益を生み出した。
- ・日本では、（ ）が（ ）を各地に派遣して交易を行った。
- ・17世紀初頭、琉球王国は薩摩藩の島津氏に征服された。
→明（後に清）への朝貢も継続し、（ ）となった。
- ・西アジアでは、16世紀初頭に（ ）がマムルーク朝を滅ぼしてエジプトを征服し、東西交易の中心はカイロからイスタンブールへうつった。